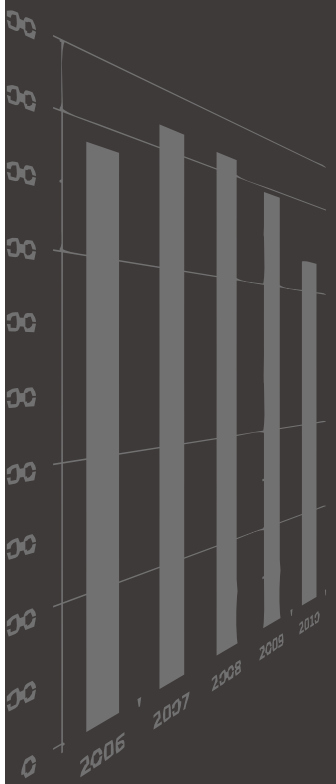
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	新たなプログラムデザインの挑戦
Author(s)	安藤, 由香里
Citation	GLOCOLブックレット. 2014, 14, p. 12-19
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/50022
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka



【第1部】
海外フィールドスタディ
「国際機関の活動を知る」

1 新たなプログラムデザインの挑戦

安藤由香里

「海外フィールドスタディ S」は、海外でフィールドスタディに参加し、様々な学習機会を得ることにより、各参加者が海外において、自らの専門性を発揮するための基礎的な力を養うことを目的としている。Sとは、SpecialtyおよびShortを意味し、専門性に特化すると共に、研究の性質上、長期間海外に出られない学生のために2012年度から創設されたGLOCOL科目である。とりわけ、『海外フィールドスタディ S「国際機関の活動を知る」（スイス・フランス）』は、参加者が自らの専門性を基に、今までとは異なる視点から自らの研究を深化するきっかけづくりを主眼として企画した。以下、企画から事前学習を経て実施に至るまでの経緯、その中で生じてきた様々な問題、そしてそれらを解決するための工夫について述べたい。

1. 企画にいたった経緯：プログラム設立秘話

GLOCOLでは、インターンシップに行きたい大学院生を支援するために、インターンシップに臨むノウハウを伝える座学や助成制度を設けている。座学とは、大阪大学の大学院生を対象に開講している「海外インターンシップ I」である[6]。また、助成制度とは、大学院生を対象とする「海外インターンシップ助成」であり、2013年度には、1ヵ月以上3ヵ月未満は20万円、3ヵ月以上は30万円を助成した[7]。

私は大阪大学に赴任した1年目に、GLOCOLで海外インターンシップ[8]と海外フィールドスタディ[9]の両方を担当することになった。赴任2年目のフィールドスタディを企画する段階で、海外インターンシップと海外フィールドスタディを担当しているからこそ、できることは何かあるだろうかと考えてみた。そして、ありそうなのに、実はない「国際機関の活動を知る」機会を作ったらどうかとひらめいた。

各人が抱く国際機関のイメージは様々であるが、「自分には全く関係ない雲の世界の人が働く場所」と考える者は少なくない。このイメージは、国際機関の拠出金が自分たちの税金で賄われている現実からすると決して望ましくない。確かに、インターンシップの助成制度を利用し、国際機関でインターンシップを行う学生ももちろんいる。しかし、いきなりインターンとして国際機関の門戸を叩くことに尻込みしてしまう少し奥ゆかしすぎる学生もいる。そのような学生たちの背中を押すようなプログラムを作りたい。こうして考えたのが、教員が学生を引率して国際機関を訪問し、専門家の前で学生が報告を行った上で、専門家と直に意見交換をすることを柱としたフィールドスタディのプログラム構想であった。

ただ、本当に実現するだろうかという不安がなかったわけではない。国際機関の人たちは非常に忙しいからである。そこで、2011年12月に海外インターンシップ情報収集のために、ジュネーヴ、パリ、ストラスブールへ出張した際、国際機関や外務省の方々に企画案を話して意見を伺った。そこで、実現可能かもしれないという感触を得て、科目化に踏み切ることにした。

GLOCOLのFIELDOは、毎年4月に全学の学生を対象としたフィールドスタディの説明会を実施している。私も、本プログラムの担当教員として説明会に臨んだ。今だから明かせるが、この時点では、参加者が集まるか不安であった。最大の懸念は、学生の金銭的負担の大きさである。GLOCOLでは、海外フィールドスタディおよび海外フィールドスタディ Sの参加者に助成を行っている。2012年度は8万円を助成した[10]。学生1人あたりの費用は30数万円となる見込みであり、GLOCOLからの助成額を差し引いても、約25万円の自己負担を学生が担わなければならなかった。説明会では他のフィールドスタディの説明も同時に行うが、他の全て

6　海外インターンシップ I〈http://www.glocol.osaka-u.ac.jp/education/internship1.html〉last visited 24 January 2014.
7　平成25年度海外インターンシップ助成応募要項〈http://www.glocol.osaka-u.ac.jp/fieldo/internship_25.html〉last visited 24 January 2014.
8　GLOCOL海外インターンシップ〈http://www.glocol.osaka-u.ac.jp/fieldo/intern.html〉last visited 24 January 2014.
9　GLOCOL海外フィールドスタディ〈http://www.glocol.osaka-u.ac.jp/fieldo/fieldstudy.html〉last visited 24 January 2014.
10　海外フィールドスタディ S平成25年度応募要項〈http://www.glocol.osaka-u.ac.jp/fieldo/fieldstudy_s25.html〉last visited 24 January 2014.

のフィールドスタディはアジアで行われる。学生の自己負担は、数万円から多くても10万円程度である。これに比べると、ヨーロッパでのフィールドスタディは非常に高額に映ってしまう。しかし、こうした懸念は杞憂となり、実際には、経済学研究科3名、人間科学研究科3名、国際公共政策研究科2名、工学研究科1名、薬学研究科1名、計10名の学生が参加することになった。

2. ロジスティックス面での挑戦：様々な調整

フィールドスタディの実施にあったっては、インターンシップ的な要素を色濃くするために、学生の専門や関心にできるかぎり近い国際機関を訪問することが望ましいと考えていた。したがって、訪問先機関を事前に決めずに、参加者の希望を汲んで訪問先を決めることにした。

まず、参加者が決まった時点で訪問希望機関を調査した。先に述べた参加者10名の所属先からも明らかのように、参加者の研究テーマは多様性に富んでいる。当然ながら多様な機関が候補として挙がってきた。そこで、訪問希望機関の調査では、単に機関名を挙げるのではなく、リーダーになりたい機関の第一希望と第二希望について、①希望する部署の正式名称（日、英、仏）、②所在地、代表電話番号、③主な活動、④主な参考資料3点の名前を提出してもらった。自分が責任をもって担当する機関について、まず各自で調査してもらいたかったからである。

フィールドスタディで訪問する都市は、事前にジュネーヴ、パリ、ストラスブールと決めていた。特に選択の余地が広かったのはジュネーヴである。パリとストラスブールは国際機関の数がそれほど多くないので選択の幅は広くない。しかし、ジュネーヴは多くの国際機関が集まっているため、選択は豊富である。これらの都市にある国際機関の中から、最終的に参加者の中で関心が高かった機関を訪問先として決定した。

いったん、訪問希望機関が定まると、様々な方法で先方にアプローチした。私自身の友人ネットワーク、知り合いの知り合いに連絡を取ったり、外務省国際機関人事センターや領事館に直接交渉をしたりした。特に今回は、外務省国際機関人事センターのご尽力に大変助けられた。

また、2012年7月にジュネーヴ、パリ、ストラスブールへ行き、2011年12月に既にお会いした方々も含め、新たに紹介いただいた方々に趣旨説明と協力をお願いし、事前調整を行った。このときは、国際機関は夏季休暇の時期に入っており、通常より職員はリラックスしているように見えた。12月に行ったのに、「また？」と思われるかもしれないが、この事前調整が成功の秘けつだったと思う。メールや電話では伝えきれないことを直に伝え、こちらの熱意や趣旨を正確に伝えることができたからである。実はフィールドスタディを9月初旬に設定したのには理由がある。7月－8月の国際機関は、長期夏季休暇をとる職員が多いため、事実上業務が停止する。多くの職員が9月に休暇から戻ってきて、まだ本格的に始動せず、忙しくない時期がねらいめではないかと考えたのである。その狙いはおおむね的を射ていたと考えられる。

ロジスティックス面で苦労したひとつは、旅行業務であった。先にも述べたように、フィールドスタディ「国際機関の活動を知る」の科目化にあたっての最大の懸念事項が費用であった。実施にあたっても、可能なかぎり学生の自己負担を抑えるように努力した。

ヨーロッパはどうしても航空運賃が高額となり、宿泊も物価の関係で高額となってしまう。そこで、安全性の確保を最優先事項としつつも、できるだけ費用を低額に抑えるためには、旅行業者を通さずに、航空券、電車切符、ホテルの予約などを全て自分たちで行うことが最も金額を抑えることができるのである。しかし、学生10名と引率教員2名の合計12人分の予約は非常に負担の大きい作業となるため、あまり勧められる方法ではない。日本-ジュネーヴ、ストラスブール-日本の往復航空券は、全員がGLOCOLに集合し、自分またはGLOCOLのコンピューターから、KLMオランダ航空のウェブサイトにアクセスし、一斉に予約した。この予約は単純往復ではないので、周遊の航空券をどのように購入するか知る機会になったと思う。次に、ジュネーヴ-パリの航空券も、一斉に航空会社のウェブサイトから予約した。購入したのはEasyjetというヨーロッパではよく知られている格安航空会社（LCC）である。当時はまだ日本ではLCCが珍しかったので、預ける荷物には別料金が取られるということを知って感心している学生もいた。

そして、ジュネーヴおよびパリのホテル予約も難問であった。安全が確保でき、高額でなく、学生は女性7名（ツイン2部屋、トリプル1部屋）および男性3名（トリプル1部屋）、教員2名（シングル2部屋）を確保すると6部屋となり、12名が一緒に泊まれる場所を探すのは容易ではなかった。特に、ジュネーヴは物価が高いことで悪名高く、パリもジュネーヴほどではないにしろ高額であり、条件に合う場所はなかなかみつからなかった。大学寮にも連絡してみたが、どこも満室であった。結局、ジュネーヴでは立地の良いドミトリー方式のホステルに宿泊した。パリでは北駅近くの若者向けホテルに宿泊したが、一階が騒々しいこともあり、参加者間ではパリのホテルの評判が最も良くなかった。他方で、ジュネーヴ、パリに

比べ、ストラスブールは観光都市であるのに、ホテル代が安くまた予約も非常に簡単でありがたかった。

3. サブスタンス面での挑戦：事前学習

科目化に踏み切る前の最大の懸念事項は、国際機関の職員は大変忙しいので、果たして学生が訪問する時間を割いてくれるかであった。実際、国際機関に勤める某友人に構想を話したところ「ふーん」と言われたことがある。そこから読み取れたのは、「忙しいのにかまっていられない」という無言のメッセージであり、へこんだこともある。しかし同時に、数ある国際機関の中に様々な考え方があるのは当然であり、一人の意見が他を代表する意見ではないこともわかっていた。そのため、学生に時間を割いてくれる方がいるならば、「学生に時間を盗られた」ということにならないように事前の準備をしっかり行うことにした。

そこで、訪問する機関が決まった時点で、各機関につき、リーダーおよび副リーダーを決めた。リーダーが国際機関の専門家の前で自らの関心のあるテーマについて報告し、副リーダーが議事録を担当することにした。また、リーダーおよび副リーダー以外にも関心のある者が集まって勉強会を行うサブグループの仕組みとした。学生たちが、授業の空き時間等を上手く利用し、サブグループが自主的に集まって討論するような活動を行うことを期待していた。

しかし、残念ながらこの仕組みがうまくいったとは言い難い。その最大の原因は、リーダーとして担当する機関だけで手いっぱいであり、他の機関まで手が回らなかったことにあると思われる。また、参加者10名の大学院生は、複数の研究科に所属している。普段の学生生活では、吹田キャンパスと豊中キャンパスに分かれている。このため、学生がグループごとに自主的に事前学習を行なうことには限界があった。

リーダーがグループメンバーをまとめるしくみが上手く機能しないことについて、事前学習中の問題点として明らかとなった時点で、私ともうひとりの担当教員の兼松教授と、どのようにすれば改善すれば良いか検討を行った。その中で、「共通テーマ」を設定することも考えた。つまり、異なる機関で異なる視点から「共通テーマ」について学生が報告し、国際機関の専門家と議論することで、より中身が濃い学習の機会となるのではないか、と考えたのである。しかし、最終的に、共通テーマを設定するという案を採用するには至らなかった。その理由は、各国際機関の設立目的や果たす役割は多種多様であり、最初から共通テーマを設定してから、訪問機関を定める方法以外にはうまくいきそうになかったからである。

また、サブグループによる自主学習については、センターの教員がどこまで介入して指導すべきかという問題も浮上した。GLOCOLは独自の学生を有さず、大阪大学のすべての大学院生および学部生にグローバルな科目を提供する使命をもつセンターである。したがって、センターの役割として、各研究科に所属する大学院生の指導教員の方針と異なる指導を行うことはできない。GLOCOLの教員が大学院生の指導教員とFace to Faceで話しあうことはほぼなく、学生を通してのみ、その指導教員の方針を知ることができる。そのため、どこまで時間外の学習を通じた指導に踏み込むべきか躊躇する場面がなかったわけではない。そうしたセンターのジレンマを抱えつつ、試行錯誤しながら行ったのが、表3「国際機関の活動を知る」事前学習を含む全体の流れである。各研究科に所属する10名全員が一斉に集まれない場合には2グループに分けて同じことを二度実施する等の工夫も行った。そして、総合大学としての大阪大学の特長を最大限活用した。すなわち、およそあらゆる専門家が存在する大阪大学だからこそ可能であるのだが、各国際機関の専門家の前で行うプレゼンテーションについて事前にコメントを依頼したのである。具体的には、メールでの指導、または本番同様のプレ報告会に招いてコメントをいただいた。このような大阪大学の専門家への協力依頼は、各学生が依頼することを原則とした。本企画の趣旨を的確に伝え、依頼し、承諾いただくことも重要なグローバル人材の実践であると考えたからである。表4は、大学院生へ助言やコメントをいただいた大阪大学の教員および大阪大学修了生の専門家である。

表３　「国際機関の活動を知る」事前学習を含む全体の流れ

5月28日(月)9:00-10:30、14:00-15:30　初顔合わせ、航空券予約等
6月21日(木)8:30-10:00　リスク管理特別ワークショップ(3名)
7月4日(水)18:40-20:10　リスク管理ワークショップ(7名)
6月26日(火)-7月13日(金)　リーダー個人面談(30分)
7月29日(日)第1回事前学習：プレゼンの方向性を全員にシェア(訪問機関の現在の重点分野、抱えている問題点を把握したうえで、どこにポイントを置くか) 10:00-10:30　連絡事項 10:30-11:30　国際機関の概要(安藤) 11:40-12:40　国際ベンチャービジネスの概要(兼松) 12:40-13:40　ランチ休憩 13:40-14:40　機関①②③④⑤(各10分) 14:50-15:50　機関⑥⑦⑧⑨⑩ 15:50-16:00　ラップアップ

9月2日(日)第2回事前学習：進捗状況報告 10:00-10:20　連絡事項 10:20-11:20　機関①②③(各20分) 11:30-12:30　機関④⑤⑥ 12:30-13:30　ランチ休憩 13:30-14:50　機関⑦⑧⑨⑩ 15:00-15:50　改善へのアドバイス(兼松、安藤) 15:50-16:00　ラップアップ
9月6日(木)第3回事前学習：本番通りにPPTを使用し10分のプレゼン→コメントを受けて修正→9/7(金)に担当者へメールで送付→9/8(土)出発 11:00-11:20　連絡事項 11:20-12:35　機関①②③(各25分) 12:35-13:35　ランチ休憩 13:35-15:15　機関④⑤⑥⑦ 15:25-16:40　機関⑧⑨⑩ 16:40-17:00　ラップアップ
9月8日(土)-17日(月)　海外FS現地実習　議事録案は全員にシェアし、帰国までに確定版完成
9月20日(木)　個人所感メールにて安藤へ提出

表4　各機関の事前学習協力者

【OHCHR】	菅原絵美特任研究員(国際公共政策研究科)
【UNHCR】	石井正子准教授(人間科学研究科)
【WHO】	大橋一友教授(医学系研究科保健学科・GLOCOLセンター長)
【WTO】	許衛東教授(経済学研究科)
【OECD】	小林傳司教授(コミュニケーションデザイン・センター) 中川功一講師(経済学研究科)
【CoE】	山内直人教授(国際公共政策研究科)
【ECtHR】	村上正直教授(国際公共政策研究科) 岡田仁子氏(ヒューライツ大阪、大阪大学修了生)

事前学習の基本的な方針は、できる限り学生の自主性に任せることであった。そして、そのフォローアップとして個人面談を用いた。事前学習の最初の段階では、各機関の専門家との議論テーマをいかに設定するかで悩んだリーダーが多い。国際機関の活動を抽象的にしか思いが描けない学生にとって、それは当然である。そのため、兼松教授の発案で、国際機関が国際社会でどのように活動しているか、その役割は何かという「国際機構論」ともいうべき説明を「国際機関の概要」として行った。国際法を学んだ者にとっての常識が、他の者にとっては全く常識ではないことを自覚させられた瞬間であった。

その後、リーダーを中心とした学生たちの関心と受入れ先の意向の調整は教員がメールを通して行った。双方でおおまかなイメージができた段階で、実際に担当教員が現地を訪問し、受入れ先の担当者とFace to Faceで調整を行った。そこでの話し合いを持ち帰り、学生側との最終調整を行ったうえで、さらに、受入れ先の機関に議論テーマを伝え承諾を得た。

以上、企画段階から、事前学習をとおして、『海外フィールドスタディ S「国際機関の活動を知る」(スイス・フランス)』の実施に至るまでの過程について紹介した。インターンシップ的な要素を取り込んだフィールドスタディという試みの独自性のために、ロジスティックス面およびサブスタンス面での想定外な様々な問題が生じてきた。その中で、担当教員だけでなく、参加者にとってもまた、様々な試行錯誤があっただろう。しかし、予定調和的ではなく、臨機応変に問題に対処するプロセス自体も、学生にとっては、グローバル人材に必要な3要素、すなわち、①調整力、②コミュニケーション力、③柔軟性を磨くための有意義な機会となったのではないだろうか。